編集後記

2020 年の年が明けてから新型コロナウィルスによる感染が広がり、年末にはこれまで以上の大きな波が日本各地を襲っている。観光や飲食業界だけでなく、ファッション業界もまた世界的に先が見えない状況に直面している。そんな時期に公刊される本誌は、言わば暗黒の大海に漕ぎ出した一艘の小舟にたとえられるかもしれない。しかし、私たちはこれを波間にあてもなく漂う運命に委ねるつもりはない。たとえささやかなものであっても、これからのファッション研究や教育、それらを通した新しい社会の構築を力強く先導する意図を込めて丹念に作られた学術誌である。本誌が、いまの苦境を乗り越えて明るい未来を切り拓こうという流れの一翼を担うことを期待したい。

国際ファッション専門職大学の紀要『FAB』創刊号の冒頭を飾るのは、2019 年 7 月に名古屋のスパイラルタワーズで実施されたシンポジウムに基づく特集「インド・ファッション　素材から考える装い」である。企画者の金谷美和准教授による趣旨紹介と 3 本の論文「南アジアの石製ビーズ産業の現在」（遠藤仁）、「熱帯アジアモンスーン林でのラック作りとその利用」（竹田晋也）、「ヒマラヤにおける 2 つの羊毛敷物」（渡辺和之）、さらに 3 人のコメントと総合討論が収められている。

特集の招待論文に続き、投稿論文「成長戦略の視点からみるファーストリテイリングのビジネスモデル」（畑中艶子）、「知的財産法によるファッションの保護」（西村雅子）、「ヴィネツィア、サン・ジョヴァンニ・クリストモ聖堂ベルナボ礼拝堂の装飾プログラムに関する一考察」（須網美由紀）、「文芸批評家佐伯彰一の変貌と断念」（大貫徹）、「「作品（アート）↔研究（人類学）」」（廣田緑・中尾世治）、「西洋人女性のスーフィズム実践」（河西瑛里子）、「ジェンダーからみる「伝統医」の継承と創出」（磯部美里）の 7 本が収められている。

注目したいのは、畑中准教授のユニクロを擁するファーストリテイリングに関する論文と西村教授の知的財産法に関する論文である。前者は、馴染み深いユニクロを幹とするファーストリテイリングの成長戦略について、また後者は普段見過ごしがちなファッションの領域と知的財産法との関係について、具体的な事例を挙げて考察を行なっている。

投稿論文に続いて、2 本の研究ノート、すなわち本大学の教育を分析した「専門職大学におけるファッション教育の展望と今後の課題」（髙間由美子・大島一豊）ならびに「新ウイーン楽派による伝統性と革新性」（今村淳）、さらに報告として「デジタル時代の美人画」（木村智博）と「一宮地場産業ファッションデザインセンターの活動」（野田隆弘）が収められている。

創設 2 年目という早い時期に高間と大島両教授による教育についての研究ノートを掲載できたのは、望外の喜びである。報告は、本学の 4 割にビジネスの経験があったり、デザインなどのクリエーションに関わるスタッフが含まれていたりすることを考慮してつくられたカテゴリーである。今回は本学の木村教授が、自身の作品についての報告を行なっている。また、非常勤講師の野田講師が自身の勤める一宮地場産業ファッションデザインセンターの活動を紹介している。

創刊号の発刊にあたっては、表紙デザインやレイアウトを担当した企画室の渡辺生記氏をはじめ、執筆者の皆様、査読担当の先生方ら、多くの方々にお世話になりました。おかげさまで、大部の創刊号を届けることができました。最後に編集委員会代表として感謝の意を表したいと思います。

『FAB』編集委員会代表・田中雅一

2021 年 3 月 31 日